

siesta

体に効く・心に効く医療情報誌 [シエスタ]

- interview 医師は天職 北村英樹 名古屋ハートセンター心臓血管外科部長
- reportage 医療施設を歩く 医療法人一陽会 原田病院
- hint あしたの医療へ 「『見える化』された農業の癒し効果とは？」 千葉古史
- food カフェ・シエスタ ひと手間でも本格！ ごちそうチキン

JMS

一例一例ベストを尽くす。
その積み重ねが
熟練の技をつくる。

北村英樹

きたむら ひでき

名古屋ハートセンター
心臓血管外科部長



2018年秋、CCT (Complex Cardiovascular Therapeutics)

2018 Surgicalにおいて、大動脈弁手術のライブ配信が行われた。

この手術枠の時間は3時間。ところが執刀医である名古屋ハートセンター

心臓血管外科部長の北村英樹氏はなんと1時間43分で終了した。

もちろん手術は成功。北村氏の手術のあまりの速さに、

ライブを見ていた全国の心臓外科医たちは度肝を抜かれたという。

速く、かつ精度の高い手術を極める。

そこに北村氏の心臓外科医としての矜持があった。



すべては患者のために 理想の手術を追求めて

北村氏が医師を目指したのは小学生のとき。偉人伝を読んで野口英世の大やけどをした手を、テレビを見ては四谷怪談のお岩さんの顔を治してあげたいと話していたという。

名古屋大学医学部に進学した北村氏が、当初から興味を持っていたのが心臓だった。また、幼い頃から細かい作業が好きで時間を忘れて没頭していたこともあり、将来、手を動かす外科系に進もうと考えていた。その頃、心臓手術を見学する機会があった。心臓の拍動が停止し、再び動き出すのを目の当たりにして、北村氏の心は定まった。「心臓手術を極めたい」。

卒業後の1998年、北村氏が研修先として選んだのは大垣市民病院だった。その理由がいかにも北村氏らしい。「忙しくて大変だから」。

同病院は岐阜県西濃地区の基幹病院で、特に救急医療には多くの患者が集まっていた。「手を動かせる病院を狙っていたので、こじかない!」と思いました。実際、さまざまな患者さんを診ることができ、本当に良い経験をさせてもらいました」と感謝する。

少しでも早く心臓外科に進みたいと、2年目に京都大学医学部附属病院心臓血管外科に移った。当時、医局を率いていたのが海外での華々しいキャリアをもつ米田正始氏(現福田総合病院心臓センター長)だ。米田氏から海外の事情を聞くにつれ、海外へ留学したいとの思いが強くなった。

実は、北村氏が海外留学を意識しはじめたのは大垣市民病院時代の先輩との酒の席でのこと。「海外の病院に留学したら何千例という手術経験ができるらしいと聞いて、それはすごいと。何の裏もとらずに鵜呑みしたのです」と北村氏は笑いながらこう続ける。「手術技量を上げる

には、やはり多くの手術経験が必要です」。

京大に移って半年後、島根県立中央病院に2年間派遣された。同病院の心臓外科手術件数はそれほど多くなかったが、一般外科も回ることができ、専門医取得の条件である100症例数をクリアすることができた。また、2年間で論文を6本書き上げ、さらには英語を猛勉強して米国の医師資格試験USMLE (United States Medical Licensing Examination)のStep1と2CK (Clinical Knowledge)に合格した。

「手術件数こそ少ない病院でしたが、とても自身の濃い2年間でした」と北村氏は懐かしむ。

念願の米国留学がついに実現

次に移ったのが当時、日本で最多の手術件数を誇っていた小倉記念病院心臓血管外科である。百戦錬磨の心臓外科医が集まるこの病院は、北村氏にとって毎日が刺激的だった。

「飲み会でも、先輩方が、超音波メスのこちら側の面は切れるけれど反対側は切れない、メスを入れる角度は何度がいいと細部にまでこだわって議論するのです。学ぶことが山ほどありました」。

新参者である北村氏が担当したのは、心臓外科手術の基本とされる「開胸」「グラフト採取」「カニキュレーション」「閉胸」。北村氏はこれらの技術を徹底的に磨きあげていった。

手術の手技は芸の世界と同じで、一流の医師のやり方を盗みながら習得していく。北村氏は時間を見つけては同病院心臓血管外科の部長で日本の成人心臓外科の第一人者である岡林均氏の手術を見学した。ただし単に見ていたわけではない。自分だったらどうするか……と常に自問しながら見つめていた。

小倉記念病院に移って4年半ほど経ったとき、夏休みを利用してソルトレイクシティLDSホスピタ

ルを訪ねた。そのとき対応したボスのDonald B. Doty先生とのエピソードが面白い。

Doty先生は北村氏の手術技量を試すために、静脈グラフト採取を命じた。グラフト採りはこの4年半、必死に鍛えてきた技術だ。北村氏はさらりとやってのけた。Doty先生が次に命じたのがTAP(三尖弁輪縫縮術)という手技だった。実は、北村氏はそれまでTAPを一度もやったことがなかった。このとき活きたのが、岡林氏の手術をこれでもかというほど見学した経験だった。岡林氏の手術を頭の中で再現しながら北村氏はTAPを行った。Doty先生の口から出た言葉は、「ヒデキ、来ていいよ」。

2006年、USMLEの2CS (Clinical Skills)の試験をパスし、長年の夢だったアメリカ留学が実現した。

無駄なポーズを排除して 手術速度を速める

勇んで向かった米国だったが、待ち受けていたのは言葉の壁だった。「コミュニケーションにはある程度自信があったのですが、実際に仕事となると細かな表現が必要になります。私は医師、看護師、医学生、みんなに『これはどう言うんだ』と質問してはメモを取りました。“ヒデキのメモ”と有名になったほどです」と笑う。

同病院は米国内ではそれほど多い症例数があったわけではないが、それでも500症例の手術に臨み、うち3~4割を執刀できた。

2年間のフェローシップ・プログラムが終わり、ジョージア州でUSMLEの最終試験Step3に合格。州内の病院にシニアフェローとして行く準備をしていたとき、思いもよらないオファーが北村氏のもとに届いた。

日本初のハートセンター、「豊橋ハートセンター」を運営する医療法人澄心会が、新たに



「名古屋ハートセンター」を設立しようとしていた。その新病院の立ち上げに参画してくれないかという申し出だった。

北村氏は豊橋ハートセンターを訪ねた時の印象を「ある種『手作り感満載』と感じ、むしろそこに感動を覚えました」と語る。お世辞にも広いとはいえない手術室に必要最小限の手術道具。その中で医師や看護師が手際よく手術を行っていた。そして、もう一つ決め手となったのは名古屋ハートセンター院長に就任が決まっていた大川秀寿氏の懐の深い人柄だった。ゼロから病院をつくりあげるのも面白いかもしれない、そう思った北村氏は名古屋に戻ることを決意した。

名古屋ハートセンター設立時の心臓血管外科部長は、京都大学時代にお世話になった米田氏だった。国内外で著名な同氏が在籍した4年間で症例数は200まで増えた。2012年にあとを引き継いだ北村氏はさらに300症例以上に増やした。それができた背景には、センター設立から10年が経ち、その存在が広く周知されてきたことが挙げられる。しかし、それだけではない。いや、それ以上に大きかったのは北村氏の患者や手術に対する真摯な姿勢が高く評価されたからだろう。

北村氏は言う。「手術には“スピード×オリ

ティ”が必要です。そうすれば患者さんの身体への侵襲が少なく、予後もよく、早く退院できます。つまり、患者さんのメリットがとても大きいのです」。

手術のスピードを上げるために北村氏は徹底的に無駄なポーズ(間)をなくすことにした。自身の手術ビデオを何度も見直しては、自分の動作の中で手が止まっているシーンを拾い出した。また、手術の流れの中にも不要なポーズがあった。これら一つひとつを丁寧に消していくにつれ、手術時間は短くなっていった。

「絶対に患者のせいにしない」 「手術に全てを出し尽くす」

北村氏には、大切にしている2つの言葉がある。一つは小倉記念病院時代に岡林氏から言われた「できると判断し手術をした以上、全責任はその医師にある。絶対に患者のせいにするな」。もう一つは、思うように手術結果が出ないと大川氏から諭された「術後に『あすればよかった』はナンだ。手術に自分の全てを出し尽くせ」という言葉だ。

北村氏は術前から全精力を使う。頭の中で

立体構築ができるくらいCT画像をずっと見続ける。全データを頭に入れ、起こり得ることも含めシミュレーションを繰り返す。それでもなお、時には想定外の事態が発生する。「そのときはガチンコ勝負。でもそれ、私、意外と得意です。それも、岡林先生や大川先生の想定外の時の対応を多く見て来た蓄積の成果だと思います」と笑顔を浮かべる。

“スピード×オリティ”を極限にまで高めようと努力を続ける北村氏の気分転換は、10年以上も前から始めたルービックキューブだ。休日には音楽を聴きながら、手術の日の朝は信号待ちをしている車中で、指のウォーミングアップを兼ねてルービックキューブを回す。パフォーマンスを下げないために体幹トレーニングを毎日行っている。質のよい睡眠をとることも心がけている。「心身が健やかな状態で手術に臨めるようにするのも仕事のうち」と言い切る。

患者は医師に命を預ける覚悟をする。医師も覚悟をもって万全の準備をし、一例一例ベストを尽くす。患者にとっての理想の手術を極めたいという求道心は今なお熱く、北村氏の原動力になっている。

「地域医療への貢献」の理念のもと 人工透析を中心に質の高い医療を提供

医療法人一陽会 原田病院 広島県広島市

高齢化が進む広島市西部地区。この地で「地域医療への貢献」という法人の理念のもと、質の高い地域密着型の医療を提供しているのが医療法人一陽会原田病院だ。2020年には、当院を1973年から牽引してきた原田知氏にかわり、西澤欣子氏が理事長に就任。新たなフェーズを迎え、さらなる医療の充実を目指す。

人工透析の拡充とともに 糖尿病やCKD、PDなどの 専門外来を開設

原田病院のルーツは、1951年、同病院理事長の西澤氏の祖父が開業した原田内科小児科医院に遡る。その医院を承継したのが、西澤氏の父・原田知氏だ。

岡山大学医学部を卒業した原田氏の研修先は、透析医療に力を入れていた呉共済病院だった。その後、広島市に戻り、73年に原田内科小児科医院院長に就任。1年後には、19床の有床診療所にし、人工透析治療室を設置した。

67年に慢性透析に公的医療保険が適応となったのを契機に、日本の透析患者は急増していた。それに呼応するように同医院の透析患者も増え続け、対応が難しくなったことから80年に病床数43床、人工透析ベッド27床の原田内科病院に拡充。87年には医療法人社団一陽会を



設立し、原田内科病院から原田病院に改称するとともに、病床数120床、人工透析ベッド56床と大幅に増床し、地域の透析治療の中心的医療施設となった。

「腎疾患や腎臓内科をはじめとした先生が多く当院に集まってきてくださいました。また、95年には、JA広島総合病院の院長で糖尿病に詳しい高科成良先生が来てくださり、糖尿病疾患専門外来が開設されました。周知のとおり、透析導入患者の原疾患の第1位は糖尿病の合併症である糖尿病腎症です。糖尿病疾患専門外来ができたことで、糖尿病から腎症、透析へと進行していく患者さんを、医師や看護師などの多職種連携で対応する基礎の芽ができたと思います」

と西澤氏。

さらに、自宅からの通院透析を少しでも便利にしたいと、96年には一陽会クリニック、2年後の98年には同市南区にイーストクリニック、西区に横川クリニックと、次々とサテライトの透析クリニック（以下、サテライト）を開院していった。

一方、原田病院も慢性腎臓病（CKD）専門外来や腹膜透析（PD）専門外来、フットケア外来を設け、透析治療や透析に深く関連する疾患を扱う外来の充実を図った。同時に、泌尿器科や内科一般、整形外科、リハビリテーション科の診療も開始し、地域住民の健康を幅広く支える体制が整えられた。



西澤欣子 理事長

ハード、ソフトを充実させ、 安心・安全で快適な透析環境を実現

原田病院では、患者が安心して透析を受けられるよう、ハード、ソフトともにさまざまなサポートを行っている。



広々とした待合ロビー



新たに設置された透析室

透析室はベッドとベッドの間のスペースにゆとりをもたせ、ゆったりとリラックスできる環境を整えている。また、各患者の生活スタイルに合わせて選択できるよう、腹膜透析や血液透析（HD）、オンラインHDF（血液透析濾過）、在宅血液透析、さらには夜間の睡眠時間を利用して行うオーダーナイト透析を揃えている。また、透析関連装置も積極的に最新バージョンに更新し、透析治療の安全性の確保に努めている。

シャント管理チームや栄養管理チーム、透析液清浄化チームなど、医師や看護師、臨床工学士、管理栄養士などの透析に従事する各専門職からなる7つのチームで、透析医療にあたっているのも原田病院の大きな特徴だ。例えば、シャント管理チームでは、患者の命綱であるシャント

を少しでも長持ちさせられるよう、超音波診断装置を積極的に活用。また、栄養管理チームでは毎月の採血結果から透析効率や栄養状態を評価し、各患者の生活環境に合った食事のアドバイスをを行っている。

同病院では2022年3月、21床の透析室を新たに設置した。その理由を西澤氏は「サテライトに長く通院していた患者さんが高齢になり、送迎が必要になってきました。住宅街にあるサテライトより、広い駐車場のある当病院のほうが、送迎が便利なので、高齢患者さんをこちらに移すことにしたのです」と話し、さらにこう続ける。「これまでの透析室はワンフロアで個室が一つしかなく、しかもコロナ陽性疑いの人もそうでない人も、入口は一緒だったため、コロナ禍での対応が大変

でした。それもあって従来の透析室とつながっていて、かつ、入口は別の透析室をつくらうと考えたのです」。

ちなみに、コロナウイルス感染症が広がり始めた当初より、原田病院では



「グランホームあさひ」の居室リハ室



軽症・中等症の透析患者を受け入れ、従来の透析室ではない別の場所を確保して、透析を行った。透析ベッド数はそれほど多くない広島市において、原田病院が透析患者難民ゼロに大いに貢献したことを言い添えておきたい。

医療と介護、福祉を シームレスにつなぐ組織編成に

「地域医療への貢献」という一陽会の理念は西澤氏の祖父の時代からのもの。その理念は2代目の原田氏に引き継がれた。原田氏は地域住民をサポートするため、介護付き有料老人ホーム「グランホームあさひ」やサービス付き高齢者向け住宅「ケアレジデンス楽々園」、通所介護施設「デイサービス楽々園」を開設。これにより、透析患者が高齢になり在宅生活が難しくなっても、これらの施設に入所し、そこから原田病院やサテライトへの継続通院が可能になった。

「近年は、近隣の療養型民間病院と連携し、そちらの病院の入院患者さんで透析医療が必要な方をバスで送迎する取り組みをしています。中には何十年も透析治療を行い、さまざまな合併症が起こったり、ADLや認知機能が低下したりする患者さんもいます。当院ではそうした方の対応も行っています」と西澤氏は話す。

医療機関だけでなく、地域の介護や福祉との連携も積極的に行い、顔の見える関係を築いている。また、22年4月には地域連携室や訪問看護ステーションなどが一体となった包括連携部が新たに立ち上がった。「サテライトには地域連携室のスタッフは常勤ではなく、要請があったら原田病院のスタッフがサテライトに出向き環境調整などを行っていました。もっと早くからサテライトに介入したいという声がスタッフから起こり、できたのが包括連携部です。近年、在宅部門と医療部門の境目をなくし、多職種が連携する組織編成を少しずつ進めていましたが、包括連携部はまさにその象徴です。担当スタッフたちは、地域住民のために何ができるかを常に考えてくれています。スタッフの意識が非常に高くなったことを嬉しく思っています」。

「横川クリニック」の長時間透析室

透析を続け、栄養状態を維持し ADL低下を防止するために 一層の注力を

スタッフの意識の高さは日ごろの教育の成果にほかならない。例えば、一陽会の看護部では毎年、新人職員対象、中堅職員対象、管理者対象など、それぞれに教育研修プログラムを作成し、一人ひとりのスキルアップをサポートしている。また、認定看護師取得を希望するスタッフには奨学金制度を設け、働きながら資格取得ができるように支援しており、この制度を利用して、すでに皮膚・排泄ケア、糖尿病看護、摂食・嚥下障害、透析看護の認定看護師が誕生している。

研究・学術活動も盛んだ。例えば、22年7月1～3日に開かれた第67回日本透析医学会では、17題にもおよぶ一般演題の発表を行い、西澤氏もセッションの座長を務めた。「コロナ禍前までは、日本透析学会にみんなで行って発表し、そのあと美味しいものを食べるのが恒例でした。前理



瀬戸内海が見渡せる屋上庭園

事長がつくった“よく学び、よく遊ぶ”という文化が根づいています」。

その前理事長がもう一つ強くこだわったのが、病院の建物だ。院内は豪華ホテルのようにゆったりとした上質な空間が広がっていて、医療機関にありがちな無機質さは全くない。待合スペースからは緑豊かな庭園を望むことができ、穏やかな気持ちにさせてくれる。屋上庭園もあり、春と秋にはバラが咲き乱れ、その向こうに瀬戸内海が横たわるといふ絶景を楽しむことができる。これら全てに、患者にリラックスしてほしいとの前理事長の思いが込められている。

地域住民からの信頼を得て、またそれが励みとなってスタッフが一丸となり地域住民のために全力を尽くす。好循環が生まれている原田病院だが、今後はどういう方向に進んでいくのだろうか。「スタッフたちがいろいろ研究して出した



シックな肘掛け椅子が並ぶ待合ロビー

結論は、透析を続け、栄養状態を維持し、患者のADLの低下を防ぐことが一番大事ということ。それには、本人だけの努力では実現が難しい。医療サイドからも今以上に、さまざまなサポートをしていきたいと思います。例えば、ADLの低下防止については、サテライトに腎リハビリテーションを積極的に行っているスタッフがいるので、そのスタッフを中心に、腎リハの輪をもっと広げていきたいですね。そうしたことが結果的に、透析患者さんの“元気で長生き”につながっていきます。それを実現するには、医療の質をより高めるために勉強しつづけることが大切です。そのためにも理事長として良い経営状況を維持しなければと思っています」。気を引き締めるように、西澤氏はこう語った。

取材・文／荻 和子 撮影／轟 美津子
写真提供／医療法人一陽会 原田病院



待合スペースの外には緑豊かな庭園が



受付ロビー

農作業のストレス軽減効果について

医・農・産業界ぐるみで実証するプロジェクトが
注目を浴びています。

農業経済の専門家で、

順天堂大学協力研究員の千葉吉史氏に

「アグリヒーリング」の可能性について聞きました。

1

ストレス計測で見えてきた「幸福感」

農業の癒し効果を明らかにする実証実験は、唾液による精密なストレス計測の技術をもつ順天堂大学の緩和医療学研究室とヤンマーの協働研究として、2016年に始まりました。園芸療法のアンケート等による検証研究は過去にもありますが、生態変化をみる大規模な実証実験は初の試みです。

各地の体験型農園とその体験者にご協力いただき、1時間程度の軽い農作業の前後で唾液を採取、コルチゾール、クロモグラニンなどの数値を計測しました。約300例のデータのうち、ほぼすべての事例でストレス値が低減していました。農作業経験がない人は1回の体験でストレス値が半減するなど短期で効果がみられ、毎週末土にふれている経験者は、そもそも初期ストレス値が低い傾向がありました。

また、「幸せホルモン」と呼ばれるオキシトシンはストレス値が下がると減る傾向がありますが、農作業によってストレス軽減とオキシトシン分泌が同時に起こり、「心穏やかで幸せ」な状態が生まれることもわかりました。※1

2

昔ながらの集団作業や手仕事も効果あり

日本の精神疾患の患者数は約420万人(2017年)にのぼり、一説には、生涯を通じて5人に1人が心の不調を抱える可能性があるといわれています。その予防策として農業によるストレス緩和を活かせば、農業や地方経済の振興につながる、新たな機会になるのではないかと。今回の実証実験でそんな可能性が見えてきました。

現在、様々な地域で滞在型の農業的ストレスケアが始まりつつあり、長野県飯島町で進行中の「飯島流ワーケーション」もそのひとつです。田植えや草取りといった農作業のほか、餅つきやわら細工、キャンプ、温泉逗留などについてもストレス軽減効果を測定したところ、集団での農作業(1時間程度)が活力アップにつながることも、昔ながらの農村体験だけでもストレス緩和効果が期待できることがわかりました。また、農村観やアレルギーの有無などにより、効果には差が出てきます。専用の問診票でその人の特性やストレス状態を把握した上で、その土地ならではの体験を活かしたオーダーメイドのプランを提供する。飯島町ではそのようなワーケーションの実現を目指しています。



飯島流ワーケーション

中央アルプス・南アルプスを望む
長野県飯島町での、
農業体験を組み込んだ
ワーケーションプログラム。
詳細は2022年内にリリース予定。
<https://ii-workcation.com/>

農業の癒し効果とは？

「見える化」された

3

農村を捨て、そして 憧憬するのはなぜか

僕自身は岡山県の瀬戸内海側に位置する田舎の生まれです。「村仕事」と呼ばれる共同での溝掃除といったしきたりが残り、土日に駆り出されて働かされることに違和感がありました。そんな時、都市部から来た大学の研究者たちに「この美しい共同体の伝統を残すには？」などと聞かれ、都市から農村を決めつける感覚に憎悪を抱いたことを覚えています。私の農村観は、寺山修司が歌集『田園に死す』でうたったような出口のない、しかし縛られる、愛憎半ばするものです。その一方で、なぜ都会人は農村に憧憬を抱くのか。田舎生まれで、一度そこに背を向けたにもかかわらず、老年になってふるさと回帰を目指す人が多いのはなぜか。そもそも農業・農村とは何か——僕が農業経済や哲学の研究者を目指し、農業の癒し効果に興味をもったのはそんな疑問からでした。



千葉吉史 Yoshibumi Chiba

岡山県生まれ。近畿大学農学部を経て、京都大学大学院で農業経済、農業哲学を学ぶ。農業生産法人美和リーフ代表を務める傍ら、コンサルティング業に従事。2016年、アグリヒーリングの実証プロジェクト立ち上げを機に、順天堂大学医学部緩和医療学研究室の協力研究員となる。

4

「心の自給率」を引き上げる

日本の食料自給率は38%ですが、野菜類の種子や培土、農業機械燃料などを輸入に頼っており、実態はゼロに近い。農業総生産の年間5兆円は、大手自動車メーカーの売上収益の半分に満たないケースも多く、農業者の平均年収は120万円程度という現実があります。食糧という生命への「必需財」を安価で提供する使命があるため、農業には利益の上がりにくい構造が潜在する。都市から描く晴耕雨読とかけ離れた面は、農業を夢のある職業にしえませんが、一方、精神疾患による社会的損失は年間8兆円を超えると推計されています※2。この損失を半分にする一手段として、農業にお金を回すことができた。農作物だけでなく「作業」そのものにも価値を見いだせば、市場構造は大きく変わります。旅の目的は「心を元気にすること」ですね。海外リゾートも良いけれど、国内の農村体験で心を癒す、いわば「心の自給率を上げる」という選択肢もありではないでしょうか。

5

「架空のふるさと」としての農村体験

僕らロストジェネレーション世代は世相的に「過去を振り返るな」と言われて育ちましたが、ストレスケアの仕事で不登校の子どもたちと接している時、「この子には振り返りたい幸福な過去すらないのでは」と感じる場合があります。そんな時、子どもがふと「お花に触ると安心する」と口にしたりする。農村体験の記憶がふるさとのように彼らを支えてくれるとしたら、意味のあることだと思います。土や虫が苦手なら植物に触るだけ、風景を見るだけでもストレス値は下がります。自然の深い懐にある農業は、各々に合った距離で皆を迎えてくれます。最近では医療関係者からよく問い合わせをいただき、ストレスケア農園経営に興味があるという看護師の方もいらっしゃいます。少しでも多くの方が「農」にふれ、農業と医療の未来について考えてくだされば幸いです。

※1 順天堂大学：緩和医療学研究室千葉吉史「ストレスケア・ワーケーションの構築に関する考察と効果推計」より

※2 平成22年度厚生労働省障害者福祉総合推進事業補助金「精神疾患の社会的コストの推計」より

コンパクト・省エネ設計

人工心肺用温度コントロールユニット 「冷温水槽 HC-1」販売開始



製品の特長・担当者の思い

冷温水槽「HC-1」は、人工心肺治療で使用され、体外循環中の患者さんの体温を維持するための医療機器です。

本装置は人工心肺治療の中でも特に心肺補助(ECMO)や心肺蘇生(ECPR)などの集中治療、救命救急領域にフォーカスを当て、必要最低限の機能を追求することによって、本体ユニットの大幅な小型化・省電力化を実現しました。

コロナ禍において特にひっ迫している医療現場の一助となればと思います。



製品案内ページは
こちらから

販売名：冷温水槽 HC-1
医療機器承認番号：30300BZX00091000
製造販売業者：株式会社タクトリ
販売業者：株式会社ジェイ・エム・エス
お問合せ先：0120-923-107
(カスタマーサポートセンター)

新生児や小児患者のために設計された 静脈留置カテーテル「ネオフロン™ プロ」



製品の特長

新生児や小児患者の血管は繊細で細く、皮膚も柔らかいため、末梢静脈へのアプローチは難しく、カテーテルの挿入は容易ではありません。

「ネオフロン™ プロ」はカテーテルの先端にテーパ加工を施し、子供の繊細な静脈に対するカテーテル挿入をよりスムーズに行うことで痛みを低減させる設計にしています。

さらに取り外し可能なウイングホルダがついているため、穿刺の際に持ちやすく、新生児や小児患者の血管への難しい穿刺をスムーズに行えます。

また、カテーテル上で血管穿刺の有無が迅速かつ視覚的に確認できることにより、血管穿刺・挿入をサポートします。



製品の特徴、
使用方法を
動画で
ご覧いただけます

販売名：ネオフロン プロ
医療機器認証番号：302AFBZX00116000
製造販売業者：日本ベクトン・ディッキンソン株式会社
販売業者：株式会社ジェイ・エム・エス
お問合せ先：0120-923-107
(カスタマーサポートセンター)

ひと手間で本格! ごちそう チキン

手が込んで見えるけれど、実は簡単。
安くておいしい鶏肉を使った
ごちそう感のあるレシピ、ご紹介します!

余ったチキンで…

ビネガーチキンサンドイッチ

鶏肉の水気を拭いて薄切りにし、バターとマスタードを塗ったパンにはさめばおしゃれなチキンサンドに。クレソンやルッコラなど、少し苦みのある葉野菜を添えとさらに美味。



MEMO

鶏ときのこのビネガー煮込み

フランス・リヨンの郷土料理をアレンジ。
お酢の力で鶏が柔らかく、ほろほろと仕上がります。



【材料(2〜4人分)】鶏もも肉 2枚(約500g)／玉ねぎ 1個／にんにく 2片／好みのきのこ(エリンギ、しめじなど) 100g／ブチトマト 12個／白ワインビネガー(または酢) 70cc／水 100cc／バター 30g／ローズマリー 適宜／塩、こしょう、サラダ油 適宜

- ① 鶏肉に塩、こしょうをもみ込む。玉ねぎ、にんにくはスライスする。ブチトマトは半分に、きのこは食べやすく切る。
- ② フライパンにサラダ油少々を熱し、鶏肉を皮目から入れて表面にこんがり焼き目をつけ、取り出す。出てきた余分な脂は拭く。
- ③ ②のフライパンににんにく、玉ねぎを入れて炒める。しんなりしたら鶏肉を戻し入れ、きのこ、ブチトマト、ワインビネガー、水、ローズマリーを加え、ふたをして15分ほど煮る。仕上げにバターを入れ、塩、こしょうで味を整える。

旨辛ヤンニョムチキン

唐揚げに真っ赤なタレをからめた韓国風チキン。
ビールによく合う、ちょっと悪魔的なおいしさです。



MEMO

ヤンニョムだれで…

韓国風海鮮サラダ



ヤンニョムだれは、鯛、カツオなどのお刺身にもよく合います。写真はヤンニョムだれで和えたイカの刺身と野菜を盛り合わせ、塩、ごま油、レモン汁で味付けした海鮮サラダ。

【材料(4人分)】鶏もも肉 2枚(約500g)／かたくり粉 大さじ6

◎下味[酒 大さじ1／塩、こしょう、しょうがのすりおろし 適宜]

◎ヤンニョムだれ[コチュジャン 大さじ3／しょうゆ、はちみつ、トマトケチャップ 各大さじ2／酢 大さじ1／にんにくのすりおろし、粉唐辛子 適宜]

揚げ油／ピーナツ 適宜

- ① 鶏肉は一口大に切り、下味の材料をもみ込む。かたくり粉を全体にしっかりとまぶす。
- ② フライパンに油を高さ2cmほど入れて中温に熱し、鶏肉を並べ入れる。下の面が色づいたら上下を返し、全体がきつね色になるまで揚げて油を切る。
- ③ ヤンニョムだれの材料を合わせて②の全体にからめ、砕いたピーナツをふりかける。



安心設計

簡単操作

効率性

シンプルな構造が、
安心で効率的な調製・投与を実現

NEO SHIELD

抗がん薬調製・投与クローズドシステム ネオシールド

調製

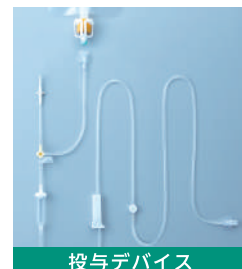
必要器材が少なく、操作が簡単。
パーツ付け替え時の曝露リスクを低減。

投与

ワンタッチでつなぐだけの簡単操作。
クローズドの環境のままプライミング。



調製デバイス



投与デバイス

販売名：ネオシールド
販売名：ネオシールド輸液セット

医療機器承認番号：30100BZX00274000
医療機器認証番号：225AABZX00017000



ネオシールド製品に関する情報は
こちらのQRコードから

ネオシールドを導入されている施設へのインタビュー 「SAFETY REPORT」Vol.4をwebで公開しています CSTDの部分導入から全導入へ—— 抗がん剤曝露対策を確かなものに



SAFETY REPORTは
こちらのQRコードから

閉鎖式薬物移送システム(CSTD)を揮発性の高い3剤にのみ導入されている施設は多く見られますが、全導入に至っている施設はまだ少ないのが現状です。そうした中、部分導入から全導入へ成功した東京女子医科大学附属足立医療センターの方々に全導入への過程でどのような取り組みが行われたのか伺いました。

東京女子医科大学附属足立医療センター

伊東俊雅氏(薬剤部 部長)

山賀亮祐氏(薬剤部 主任)

小湊篤子氏(看護部 がん化学療法看護認定看護師)



人と医療のあいだに...

製造販売業者

株式会社 ジェイ・エム・エス

〒730-8652 広島市中区加古町12番17号

■ カスタマーサポートセンター

0120-923-107 (受付時間 9:00~17:00)

《表紙の言葉》サッカークラブVflボーフムの本拠地、ドイツ西部のボーフム。一本道の先の

ケムナーダー湖畔はピクニックを楽しむ人で賑わう。(写真: imagebroker / アフロ)

企画・編集: HARUMI INC. デザイン: 山田デザインオフィス 印刷: 公和印刷株式会社

▶「シエスタ」バックナンバーは
こちらからご覧いただけます。

